Save Tropical Forests

フータン

HUTAN Group

140

森の通信

2021.6.12

インドネシア中央カリマンタン州での植林モニタリング
成長の早いAruは植えてから1年3ヶ月で人の背丈に届くほどに！

CONTENTS

・People (58) 春日直樹さん……p 3
・熱帯林破壊と私たちの消費生活 ……p 4〜7
・団体紹介や講師派遣のリニューアル ……p 8〜9
・生物多様性の経済学：ダスグプタ・レビュー…p 10
・先住民の大成果！プナン平和公園の認可 ……p 11
・世界の森林ニュース ……p 12〜13

パーム油の問題は、先進国に暮らす消費者による、主に途上国に暮らす先住民や地域住民の土地収奪や労働者の人権侵害といった搾取、生態系の損失による動植物の搾取、泥炭地破壊による温室効果ガス排出など気候変動による若者世代や次世代への搾取を孕んでいます。人や国家間の不平等や差別、種差別、世代間差別と言い換えられます。差別を無くすためには、一人の人間が理解して差別をやめることだけではなく、社会の中の差別そのものと戦い続ける必要があります。環境問題とは差別との戦いでもあるといえましょう。

事務局長　石崎 雄一郎

【ウータン活動記録】

1/16 「私たちの生活と熱帯林のつながり～ヴィーガン料理といきものクイズを通して考えよう！」（佐々木さん、いっしー、みっしー）
1/18, 3/4, 4/9 消費から持続可能な社会をつくる市民ネットワーク会議（いっしー、ゆっこ）
1/27 H.I.S.のパーム油発電に反対するTwitterデモ アクション
1/31 炭焼き肉と京の野菜 Nicoで気候変動の映画上映会＆トーク（いっしー、みっしー）
2/3 朝日新聞の取材対応
2/9 パーム油発電に関して山本わか子議員と面会in福知山（いっしー、みっしー）
2/13 「ボルネオ発！多様な食べものたち大集合」（登壇者：高橋仙人さん、上林洋平さん、広若剛さん／いっしー、みっしー）
3/4 アースデイ大阪メンバーへのオンライン・ゲスト講演（いっしー）
3/13 エコネット近畿情報交流会（参加型オンラインミーティング）「暮らしまるごとSDGs」にてゲスト講演「パーム油発電から考える環境政策や私たちの生活」（ゆっこ）
3/16 FIT事業計画策定ガイドライン改正案に対するパブコメ提出（バイオマス発電について）
3/17 舞鶴・福知山パーム油発電完全撤退記念オンラインセミナー「輸入バイオマス発電を市民の手で止めよう！」（いっしー）
3/27 市民エネルギーとっとりトークイベント～森のことを話そう～（いっしー）
4/18 炭焼き肉と京の野菜 Nicoで「森をふたたび」上映＆トーク（いっしー）
5/15 関西NGO協議会総会＆関西NGO大学のあゆみ～「市民による学びの場」の30年～参加（いっしー）
5/24 G-Bio石巻須江発電所事業 環境影響評価準備書への意見を提出

people 58

春日直樹さん

困った時にアドバイスをくれる御大！

「継続は力なり」と言います。ウータンの日ごろの活動、頼もしく思います。
2010年生物多様性の国際会議が名古屋で開催。生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)である。ウータンのメンバーと共に参加した。国際会議の華やかな雰囲気があり、環境をテーマとしている人と交流を深めることが出来た。生物多様性を損なわない。絶滅危惧種を出さない。行動戦略を「愛知目標」とした。議長国日本は「愛知目標」を達成していない。
自然災害が頻発する昨今、国土強靭化の下で大規模開発が行われている。自然を恐れぬ行為だ。その事例が、リニア新幹線や北陸新幹線の建設計画である。両新幹線建設のカギを握るのは大深度地下40m以深の掘削工事である。東京外環道では工事が原因で地盤が陥没した。地下水異変や残土処分は生態系にダメージが生じる大問題だ。リニア新幹線も北陸新幹線もいらない。
写真は生物多様性を紹介する催し案内です。

（文責・春日）

熱帯林破壊と私たちの消費生活とのつながり

石崎雄一郎

熱帯林は生物多様性の宝庫

ウータン・森と生活を考える会は、ボルネオ島のマレーシア・サラワク州の熱帯林から来日した先住民の「私たちの森をこれ以上壊さないでくれ！」という声を受けて1988年から活動を開始しました。調べると、ボルネオ島からの熱帯材は、身近な家具や合板、学校の箒や選挙ボードなどにも使われていました。「私たちの生活を見直し、森で生きる先住民の生活のことを共に考えよう」と市民が学習会を開催したことが会の原点です。

日本の国土の2倍ほどあり、かつてほぼ全土が原生林に覆われていたボルネオ島の熱帯林は、貴重な野生生物の宝庫です。1億年以上前に誕生したと言われる被子植物の花粉が昆虫を惹きつけ、果実が鳥類を惹きつけ、哺乳類が発達し、生きものの楽園が生まれました。かつて大陸とつながっていたこの地域は、氷河期も温暖な　気候が続いていたために多くの命が残り、1万年前に海面上昇で島となり、貴重な生態系のタイムカプセルとなったのです。

熱帯林は、南米のアマゾン、東南アジアのボルネオ島、スマトラ島、ニューギニア島、アフリカのコンゴ盆地など赤道直下に広がる森林で、気温が高く、降雨量が極めて多く、多様な植生が織りなすジャングルです。ボルネオ島では、オランウータンやテングザルなどの類人猿、空飛ぶトカゲやヘビやカエルなど樹冠層で生きる爬虫類や　両生類、世界中に愛好家を持つユニークな鳥類、擬態する昆虫、寄生植物や食虫植物、光る菌類などが数万年以上の時を経て互いに関係し、進化してきました。森の中で移動しながら吹き矢でイノシシやサルを仕留め、森の恵みを糧としてきた狩猟採集民プナンなど、先住民もまた、自然と共に生き延びてきました。

種がお互いに関係し合いつながりあって、全体の生態系が作り上げられています。一つの種が欠けると、他の種にしばしば深刻な影響を与えます。例えば熱帯林のイチジクの仲間は、オランウータンをはじめ、沢山の動物の食料ですが、小さなイチジクコバチという蜂に花粉を運んでもらいます。イチジクの種類ごとに異なるイチジクコバチがいます。一種のハチに適応した植物は、その蜂がいなくなれば生きてはいけません。この関係を相利共生といい、長い時間をかけて共進化してできた結果なのです。

熱帯林は地上の数%ですが、地球上の生物種の半数以上が存在しています。熱帯林は生命の大きな源であるだけでなく、その一帯に暮らす人々にも水や土壌を供給しています。地球全体の気候の安定にも寄与しています。また、世界中で使われている薬の原料の多くを生み出すなど、生態系の多様性、種の多様性に加えて、遺伝子の多様性にとっても重要な場所です。熱帯林は私たち人類全体にとっても極めて大切な「生物多様性の宝庫」なのです。

▶ボルネオ島に棲む生き物たち

「見えない油」パーム油

いま地球上の生物種はものすごいペースで失われています。2019年には、100万種が数10年のうちに絶滅する危機にあると国連が報告しました。

東南アジアに広がる熱帯林では、商業伐採や違法伐採が横行した後、アブラヤシのプランテーション（単一作物の大規模農園、以下アブラヤシ農園）が拡大しました。1999年からの20年間で日本の350万ヘクタールもの熱帯林が破壊され、アブラヤシ農園と転換されました。

熱帯作物であるアブラヤシの実から採れるパーム油は、インスタント麺、スナック菓子、マーガリン、菓子パンなどに使われるショートニング、アイスクリーム、チョコレート、洗剤、石鹸、化粧品などに使われます。単位面積あたりの収穫量が多く年中実をつけるために安価で生産ができるパーム油は世界最大の生産量を誇り、短時間に搾油しなければ酸化する特性があるために大規模に集約化されて開発されます。融点が高くて加工や保存がしやすく、トランス脂肪酸のリスクが比較的低いことなど、メーカーや小売、消費者にも好まれやすいこともあり、消費量も世界最大です。コンビニやスーパーで加工食品を手にとれば、そのほとんどに「植物油脂」という表記が見つかりますが、多くがパーム油を原料としています。日本では加工用の油脂として使われてパーム油の表示が義務付けられていないために「見えない油」とも呼ばれています。

その一方でアブラヤシ農園は野生生物の生息地を奪い、国家ができる以前から暮らしてきた先住民や地域住民の土地収奪や住環境への影響も計り知れないものとなっています。当会のメンバーは、インドネシアの中央カリマンタン州で、先祖代々のお墓が企業による開発で破壊された元王族の方の話を伺ったり、村人の生活用水がアブラヤシ農園からの農薬で汚染される現場を見たりしました。かつてラミンやメランティやウリンという木々が立ち並び、オランウータンやテナガザルもたくさん生息する場所だった熱帯林が転換され作られたアブラヤシ農園で、オランウータンの殺死体を発見したこともあります。

また、ボルネオ島やスマトラ島は、1900年代後半以降にアブラヤシや産業用植林などの大規模な開発を目的とする排水によって乾燥化と荒廃化が加速化し、森林火災が起こりやすくなりました。2015年には、インドネシアで東京都の面積10倍を超える260万ヘクタール以上の森林が焼き尽くされ、日本の1年間の総排出量を超える16億トン以上の温室効果ガスが排出されました。高温多雨の熱帯地域に広がる地下水位の高い湿地で、樹木の枝や葉など有機物の遺骸が十分に分解されずにできた「熱帯泥炭地」に貯留された莫大な炭素が放出されたことが大きな原因です。

熱帯林はいまや、人為的な開発要因によって「炭素の貯蔵庫」から巨大な「炭素の放出源」へと転じてしまっており、気候変動にとっても大きな脅威となっています。

▲ ボルネオ島の森林火災を消火する近隣住民たち

▲ 見渡す限りアブラヤシだけが続く大規模農園

地域住民／ローカルNGOとの熱帯林保全活動

アブラヤシ農園開発による計り知れない被害が起こっている一方で、インドネシアではジャワ島などからの移住政策もあり人口が増えたことや、貨幣経済の流入や生活の近代化が進んだことなどにより、定期的な収入を得られる機会として開発を歓迎する地域住民の声もあることは事実です。子どもが高校や大学へ通うために下宿すること、親が仕事でバイクを使うために現金が必要になることを、日本のような先進国の都市部に暮らす私たちが容易に否定することはできません。

インドネシアのローカル環境NGO「FNPF」で働いていたバスキさんは、熱帯林を守るためには、地域の村の住民を巻き込む以外に方法はないと考え、村人主体の収入向上につながる熱帯林保全のしくみ構築をめざしてきました。森から拾ってきた在来種の新芽を苗床で育て、それを植林するだけではなく、他のNGOなどに売ることで地域の収入になると考えたのです。

また、アブラヤシ農園と川沿いの熱帯林の間の土地を買い取って、森林農法（アグロフォレストリー）を取り入れ、牛や鶏や養殖魚とともに循環型の農業を始めました。農作物が売れれば収入になるし、外から野菜を買わなくても自分たちで育てて食べることもできます。

ウータンでは2012年より、収入向上につながる熱帯林保全のしくみの一環としてタンジュン・ハラパン村でのエコツアーを開始しました。エコツアーでは、日本からの参加者はボルネオ島の自然と文化を体験し、熱帯林の問題と保全に向けた活動を経験することができます。受け入れ側の村人にとってはツーリズム時のホームステイやガイドを通して収入が得られるため、自然と文化を保全するインセンティブになります。ツアー参加者と村人はプログラムやホームステイを通して交流したり、知見や経験を共有したり、互いの活動を発展することにつながります。

タンジュン・ハラパン村の周りの森がアブラヤシ農園に変わり、村を流れる小川が氾濫したり、森の減少でひどく蒸し暑くなる日が続いたりといった変化にショックを受けた若者が増えてきました。農園での労働は企業が約束していたほど条件が良くはなく、アブラヤシの苗が2〜3年で育って収穫期になるとますますキツくなり、アブラヤシ農園での仕事を辞める若者が続々と出てきました。

そんな中で、豊かな森に囲まれていた子どもの頃のように、持続可能な形での村づくりを行いたいと願う若者たちが村の青年団を再結成し、コミュニティ支援、生態系の回復、環境教育を活動の柱とし、苗づくり・植林やエコツアーなどをウータンと行ってきました。バスキさんがNGOとして村人とともに行ってきた活動は、村人主体の活動へと引き継がれていったのです。

日本に暮らす私たちに何ができるか？

さて、日本に暮らす私たちには何ができるでしょうか？ 例えば、パーム油の問題に気づいた時に、

▲ 日本からボルネオ島を訪れるエコツアー

▲ 在来種の植林を行う国立公園内での現場にて

消費者としてどのような油を日々使っているのかを調べてみれば、日常で料理に使う油、加工食品に使われる油には、菜種油、大豆油、オリーブオイル、米油、ヤシ油（ココナッツオイル）など様々な種類のものがあることがわかります。

「とんでもない面積がパーム油のために開発されているので使いたくない！」と言いたくなるかもしれません。世界で第2位の植物油脂は大豆油です。大豆の栽培面積はなんと1億2000万ヘクタール超、日本の国土の3倍以上です。2020年に生産量1位となったブラジルでは、大豆のプランテーションが豊かな熱帯サバンナ地域であるセラードを破壊して作られた上、肉用牛の放牧地を北へ押し上げることでアマゾン破壊につながっています（大豆は肉用牛の餌にも使われます）。世界で第三位の　植物油脂は菜種油ですが、菜種の栽培面積は3400万ヘクタール、日本の国土に近い大きさです。

また、多くが遺伝子組換えの危険性が指摘されています。どの油が良い悪いではなく、どこでどのようにどれくらい作られているかが問題ではないでしょうか？

昔の人々にとって油はもっと貴重なものでした。安く使えるようになった背景には、海外での大量生産のためのプランテーション化が関係しています。一方で、油をたくさん使うようになった背景には、私たちの日常のライフスタイルが影響しているのではないでしょうか？その日に採れた新鮮な野菜をその日のうちに調理して食べる生活をしていれば、ほとんど加工食品を消費することがありません。しかし、夜遅くまで仕事をし、締め切りに終われて徹夜をする…そんな生活が続けばファミレスやコンビニに頼ることになるでしょう。

当会のメンバーの神前進一先生が代表を務める「菜の花プロジェクトみのお」では、0.1ヘクタールに満たない有機農園で、全て手作業により育てた菜の花から取れた菜種から30リットル弱の油を作っています。畑を耕し、種をまき、苗を植え替え、育て、収穫する。汗を流して作られたわずかな油…いかに手作業で作られた油が貴重なものか、この世界に安い油がたくさん溢れているのかがわかります。

私たちは日々の消費行動を変えることで、企業や店舗への影響を通じて社会を変えることができます。企業に自分たちの望む商品をリクエストしたり、行政に消費者として望ましい政策を要望することもできます。当会では莫大なパーム油が、バイオマス発電に使われようとしている計画を知り、地域住民の方々と勉強会を重ね、企業や金融機関や行政へ粘り強く訴えを起こしてきました。その結果、京都府で2カ所のパーム油発電所を撤退に追い込むことができ、国の政策もより厳しいものへと変わってきています。私たち消費者・市民は必ずしも無力ではありません。ライフスタイルを見直すとともに、企業活動や政策に対して声をあげていくことが求められています。

▲日本でパーム油が使われている食品や日用品の例

▲菜の花プロジェクトみのおでの農作業の様子

ウータンのパーパスとブランドステートメントを策定しました

2020年度にサステナブルコミュニケーションプランナーの有川真理子さんのコーディネートのもと、ウータンメンバーで話し合いを重ね、外部からウータンに求められる存在意義であるパーパス、理念や使命を簡潔な文として表したブランドステートメントを策定しました。また、めざす社会像としてのビジョンを明確化し、使命としてのミッションを再度確認しました。

パーパス（存在意義）

熱帯林と暮らしがつながる
アクションを生み出す

ブランドステートメント

熱帯林の仲間とつながる

ビジョン（めざす社会像）

ウータン・森と生活を考える会は、多様な生き物や人びとを支える森を守ります。私たちの生活と熱帯林のつながりを感じて、自然と共生する社会をめざします。

ミッション（使命）

ミッション① 熱帯林破壊を止める！
ミッション② 熱帯林を再生する！
ミッション③ つながり、伝える！

ウータンの紹介動画が完成しました！

動物の写真なども撮られているカメラマンの松井舞さんに依頼し、大阪都島の熱帯林好きが集まるレンタルスペース「ルマ・ボルネオ」、「菜の花プロジェクトみのお」の有機農園、京都産間伐材の燃料を販売する「京都ペレット町家ヒノコ」などで撮影したウータンメンバー（西岡良夫代表、神前進一先生、武田裕希子さん）のインタビューやボルネオでの活動の写真や動画を編集していただき、３分ほどの素敵なウータン紹介動画を作っていただきました。ぜひご覧ください！

▶ https://youtu.be/xPd22HKmSUo

講演の動画をつくりました&
講師派遣を募集しています！

ウータン・森と生活を考える会では、「**熱帯林と私がつながる**」ことをコンセプトに、私たちの暮らしと森林減少とのつながりについて理解を広め、消費など様々な行為を見直すよう提案する啓発活動を行なっています。これまでに、大学、高校、中学校、小学校、生協などの市民講座、NGOや国際協力機関のセミナーなどで講演やワークショップなどを行なってきました。
講師派遣をご希望の方はお気軽にご相談ください。
詳細はこちら ▶ https://hutangroup.org/lecturer-2

また、事務局長の石崎雄一郎が講師依頼を受けてオンラインで講演した際の映像を、ウータン会員の勝山雄喜さんがYouTube動画に魅力的にまとめてくださいました。
動画はこちら ▶ https://youtu.be/watch?v=mjoWB93_588

YouTube動画・レジュメ・スライド画像はウータンのウェブサイトで公開しています。引用元として「ウータン・森と生活を考える会」をご紹介いただければ、自由にご使用いただけます。仲間内での勉強会や、SNS（Instagram、twitter、Facebook）などで皆さんのメッセージと共にシェアしてください！

▼ レジュメはこちらからダウンロードできます

http://hutangroup.velvet.jp/db/pdf/savetropicalforest.pdf

▼スライド画像はこちらからダウンロードできます

https://hutangroup.org/studyslides

▼スライド画像の例

「生物多様性の経済学：ダスグプタ・レビュー」に見える熱帯林の価値

Gyro加納

英ケンブリッジ大のダスグプタ経済学名誉教授が、今後の生物多様性と経済への指針となると言われている「ダスグプタ・レビュー」最終報告書を2021年2月に発表した。これは生物多様性の重要性を経済学の観点からまとめたもので、パーム油のプランテーションや先住民にも言及されている。

ウータンの活動への理解に繋がると思い、関連する情報をまとめた。

- ✓ **私たちの経済、生計、そして幸福はすべて、私たちの最も貴重な資産である“自然”に依存している。**
- ✓ **生態系がどのように機能しているか、また、生産と消費のために天然資源を採取し廃棄物を排出する経済活動によって、生態系がどのように影響を受けるかについて、生態学の知見にしっかりと基づいたものになっている。**
- ✓ **経済活動の尺度として、短期的なマクロ経済分析と管理には国内総生産（GDP）が必要。ただし、GDPは自然環境を含む資産の減価償却を考慮していない。**

▲ “Dasgupta_Review_-_Headline_Messages.pdf” より

これは2006年に公表の「スターンレビュー」の生物多様性版とも言えるものであり、今後の経済政策にも大きな影響をもたらすと考えられる。GDPの他にも自然環境を含む資産を正しく評価する必要性を提言していることは前例がない。

森林伐採や土地転換が進む中、減価償却項目としての自然の環境の資産評価が進めることが、森林伐採等の見直しや熱帯雨林保全の必要性のエビデンスであり、強力なツールになることを期待したい。

熱帯林保全、パーム油についても具体的な記述がある。

- ✓ **1990年から2005年にかけてのアブラヤシ農園の拡大は、森林を犠牲にして作られた。低地は熱帯雨林の被覆の50％以上を失った。いくつかの推定によれば、それはどの生物地理的地域でも生物多様性の急激な低下をもたらした。**
- ✓ **アブラヤシのプランテーションは熱帯雨林を断片化する。第3章で述べたように、断片化は生物多様性を減少させる。ボルネオ島サバ州のウル・セガマ・マルア森林保護区とアブラヤシ農園内とで鳥の豊富さ、種の豊富さ、種の構成をサンプリング比較したところ、断片化された森林はそうでない隣接する森林よりも鳥にとって価値が低いことが判った。**
- ✓ **インドネシアでも、プランテーションができたことで、地元の生活を変え、彼らの習慣、価値観、伝統的に神聖な場所の守護者としての多くの能力をかき乱した。マレーシアのボルネオ島サラワク州では、先住民のコミュニティとアブラヤシ企業の間で土地紛争が発生した。裁判所は繰り返し先住民を支持する判決を下し、政府による「先住民の慣習的権利」の限定的な解釈に誤りがあると判断したが、州は開発許可を出し続けた。**

▲ “The_Economics_of_Biodiversity_The_Dasgupta_Review_Full_Report.pdf” (p217) より

冒頭にあるように、経済、生計、幸福の基盤として自然を評価しており、具体例として、アブラヤシ農園の点在による森林破壊、熱帯雨林の断片化、生物多様性の低下が経済学視点でも問題があることが明記された。

これは森林保全のモチベーションに繋がるだけでなく、熱帯雨林の改善が経済学の視点でも合理的であり、広い視点で評価／協力の必要性を訴えたものではないか。

また、先住民の習慣、価値観等にも焦点を当て、人権問題の観点の明記は重要だ。

国レベルの政策に対して、GDP以外の指標に言及した本レビューは、その政策にも、ステークホルダーの影響下にあることを示唆している。

30年に渡り、”熱帯雨林の保全、先住民との連携、改善としての在来種での植林”を行ってきたウータンや各NGOの経験を通じて、現地住民の声、熱帯雨林への理解、価値を広げ、熱帯雨林の大規模な改善に繋がることを期待したい。

プナン先住民・旧友Komeok氏らの『先住地を記す地図作成－平和公園案』から20年、大成果！

代表・西岡良夫

サラワク原生林の大地は先住民の地だ!!

2020年、ITTO（国際熱帯木材機関）が「プナン平和公園」を認可した。以下、Mongabayの2021年1月26日の記事から一部要約してその内容を紹介する。

「ITTOの承認の発表は公園指定に向けた一歩であるが、まだ伐採企業がこの地を脅かしている」とコメオク氏は言う。一方、「プロジェクトの目的は、地域社会に力を与え、持続可能な森林の使命に貢献する」とITTOは言う。

「一歩前進だが、公園が全ての保護に繋がることでもない」とSave Rivers のPeter Kallang氏は言う。「790km²の伐採権を振りかざし、サムリン木材は原生林破壊をまだ企んでいるから。」KERUAN代表のコメオク氏は言う。「バラム川上流のコミュニティは、このITTOの偉大なサポートは有難いと感じている。だが木材企業は原生林伐採をしようとしている。大きな一歩前進だが、我々は戦い続ける！」

ありがとう!! Mr. Joe Komeokとサラワク州の仲間たち！

コメオク氏と筆者の思い出

マレーシアのNGO・KERUAN代表)のコメオク氏と2008年10月に久しぶりに会う。彼宅で話し合う。

私は1996年に彼と再会し、同年から2年かけて彼と薬草の事前調査をサバ、サラワク州で実施。その成果・検証で、サラワク州の奥地にウータンは、1998年から「**プナン伝統的薬草診療小屋**」の建設支援を始めた。完成は2001年元旦。建設経費は12万円弱。同時期にブルーノ・マンサー財団も闘うプナン族のLong Korong村に小中学校建設の支援を実施。この2つの支援により奥地の住民は、街に出なくても必要なことが出来るようになった。

「毒蛇にやられた時も保管の薬草で対処出来たし、子どもたちは小中学校建設で喜んでいる。企業が勝手に伐採権利を得たと宣伝した時に、プナン語以外のマレーシア語を学んで嘘つきの悪事を判明出来た。有難い支援だった。伐採企業が原生林を壊さなければ、狩猟の獲物も多く取れる！金が無くても森があるから、豊かな暮らしが出来る。

私達は、プナンだけでなくサラワク先住民の権利を守るために、先住民が慣習的に使用しているバラム川上流の地図作りを始めた。以前から木材企業サムリン社は、先住民の居住区で同意もなく違法な伐採を繰り返して来たからだ。

我々の村や周りのLong Sepigen村等のプナンの仲間は、1997～1998年にわたり、サムリン木材による原生林破壊の伐採道路建設を止めた。あなた(西岡)と一緒にその道路建設の端を確認しに行った2000年、道路予定地は鬱蒼と木々や灌木に覆われていただろう。道路建設を木材企業が再度するのは大変だよ」とコメオク氏が笑って話す。

「違うプナン村の仲間達は、強力な道路建設反対を展開出来ない所も多いから、他の先住民の権利を守る為に地図作成が必要だった。2001年、薬草診療所の建設が済んで、ウータンからの支援(※)が無くなり、地図作成調査への初期費用がなくて困った(笑)。ウータンの2003年からの「**違法材ラミン停止キャンペーン**」の成功で、国際的な違法材停止の礎の1つになり、仕方ないと思ったよ」とコメオク氏が言う。

木材企業は原生林の破壊を諦めなかった。コメオク氏らは、対抗手段として、闘う63のプナン村落の人々に呼び掛け、慣習的に使用の大地や森や狩猟地域、果実採集地、墓場を地図に入れて、**先住民の慣習的居住区を示す**ためにmappingを開始した。木材企業の伐採地でないからだ。

2001年からのコメオク達の構想、実行がやっと2020年12月に国際機関に認められた。先住民の権利を守るために約20年奮闘してきた彼と仲間に敬意を表したい。

(※)Mapping初期調査は約100万円で支援をやめた!

熱帯林は2050年までに炭素排出源になるとの研究

上昇し続ける気温の影響で熱帯林を含む地上の生態系は2〜30年後には炭素の純吸収源から純排出源になるとの研究結果。気温が上昇すると植物の光合成は低下するが，植物は呼吸しCO2を排出する。地上の植物は人間が排出する炭素の30％を吸収しているが，気温上昇が続くと2050年頃には臨界点を超え世界の森林は純排出源となる。[Guardian　1月13日]

世界の森林消失の最前線と要因に関するWWF報告書

WWFが発表した報告書によると2004〜17年に熱帯と亜熱帯で主に商業的農業によりカリフォルニア州に匹敵する4300万haの森林が失われ，その3分の2は中南米。森林消失の最前線は中南米9，アフリカ8，アジア・オセアニア7の24地域。森林消失に取り組むには政府と企業の一時産品調達から先住民や地元住民の土地権まで幅広い政策手段が必要と指摘。[Mongabay　1月13日]

NGOがアマゾンからセラードへ100万haの植林計画

オランダNGOのBJFがアマゾン熱帯林からセラードサバンナの遷移帯で6州をまたぐ2つの川沿いに南北2600㎞，幅20㎞の緑の回廊を作る膨大な計画に着手。民有地100万haにアサイやカカオなど経済樹と地力増進効果の高い樹種を17億本植林し，アグロフォレストリーによる住民の経済的向上と環境保護の両立を目指す。[Mongabay　2月17日]

GFWが雲の影響を排し短周期で森林破壊を探知

世界資源研究所のGlobal Forest Watchはヨーロッパ宇宙機関のSentinel-1衛星を利用した森林破壊探知レーダー（RADD）で6〜12日間隔で雲や煙霧の影響を排した警戒システムの運用を開始。雨の多い熱帯林や雨季でも迅速な探知が可能になる。[Mongabay　3月3日]

世界の森林消失面積が2020年に増加

Maryland大学とGlobal Forest Watchのデータによると2020年の森林消失面積は熱帯，温帯とも増加したが，増加率は熱帯原生林で最も高かった。景気後退にも関わらず熱帯原生林の消失は前年より12％増加し420万ha，国別ではブラジルが170万haで突出，以下コンゴ民主共和国，ボリビア，インドネシアと続く。[Mongabay　3月31日]

適切に保護されている世界の森林はわずか6.5％

Oregon州立大学研究者グループによると全世界の自然保護地域（PA）の森林消失率は保護地域外より41％低いだけで，適切に保護されている森林は6.5％に過ぎない。これはCBDの愛知ターゲットの17％を大きく下回り，保護地域の面積だけでなく保護の質による効果を含めた2020年以降の目標設定の必要性を提案。[Mongabay　3月31日]

ブラジル精肉業JBS社が2035年森林破壊ゼロを公約

ブラジルの最大手精肉業JBS社が2035年までに世界のサプライチェーンで森林破壊ゼロ，2040年までにCO2純排出ゼロを公約。同社は過去2年間で4万ha以上の森林を破壊，うち半数が違法伐開とされ，Mighty EarthとAidenvironmentの大豆と牛肉の森林破壊追跡調査で100点中わずか1点と評価された。森林破壊ゼロをブラジルで初めて公約したが，環境NGOはあまりにも遅く不十分と批判。[Mongabay　4月6日]

先進国政府と企業が熱帯林保護の炭素クレジット設立

米国，英国，ノルウェー政府は民間企業とともにこれまでの2倍にあたる10億ドルの炭素クレジット立ち上げを気候サミットで表明。REDD＋プログラムとして，企業は排出したCO2と同量のCO2を森林に固定する途上国に支払う。民間企業はLEAF（森林金融促進による排出削減連合）のAmazon，Airbus，Nestle，Unileverなど。[Mongabay　4月23日]

牛肉に関する新たなスコアカードをMighty Earthが発表

Mighty Earthは牛肉を扱う小売業，スーパー，ファーストフード15社の2020年森林破壊ゼロ公約に対する新しいスコアカードを発表。すでに期限を過ぎたが公約と行動の乖離は大きく，最も高い評価のTescoで100点中65点，以下Marks & Spencer，Carrefourと続く。ブラジルから米国やヨーロッパへの牛肉輸出が増加し先進国消費者は意図せず熱帯林破壊に加担しているが，消費者意識の高まりが圧力となりサプライチェーンを見直す動きが広まり始めた。[Mongabay　4月23日]

ボルソナロ政権下で大規模森林破壊が大胆さを増した

ブラジルは2009〜18年にはアマゾンの森林破壊を低下させる政策が効果をあげていたが，2019年のボルソナロ大統領就任後は年間森林消失面積が61％増加。1か所の皆伐面積も過去5年間で15haから24haに増加し100ha以上も普通になった。これは環境予算の大幅削減で環境省が骨抜きにされ，監視や法執行力が低下，違法伐採者が摘発を恐れなくなったためで，違法伐採者への罰金は2年間で42％減少した。こうした状況に先住民リーダーは国際司法裁判所に大統領を人道に対する罪で調査するよう求めた。[Mongabay　2月1日，4月26日]

FOREST NEWS インドネシア＆ボルネオの森林ニュース

カリマンタンでアブラヤシ開発事業権の発行続く

WALHI（インドネシア地球の友）はアブラヤシ開発事業権の発行が依然続いていると発表。大統領府長官が現政権下ではアブラヤシ開発は一切ないと発言したのに対し，WALHIは環境林業省のデータ分析から2014～19年に約42万haのカリマンタンの森林にアブラヤシ開発事業権が発行されたと公表。またJatam（鉱山アドボカシーネットワーク）によると同時期に47万haの鉱山開発許可も発行された。[CNN　1月21日]

サラワクのBaram Peace Parkの設立をITTOが支持

2020年12月にITTO（国際熱帯木材機関）はサラワク森林局からのBaram Peace Parkの提案を承認。サラワク北東部バラム川上流の2835㎢は野生生物，森に頼って暮らす先住民の生計手段，残された最後の原生林の保護を目指す。約200万ドルの設立資金の4割は日本などの熱帯林消費国が，残りは州政府が拠出。2009年にプナン等の先住民により発案されNGOが支援してきたが，2020年にSamling社に一部の伐採権が与えられるなど実現に向けた課題も残る。[Mongabay　1月26日]

アブラヤシ紛争解決にはより良い方法が必要と研究者

西カリマンタン州で過去20年間のアブラヤシ開発に伴う紛争を調べたオランダ国立研究所（KITLV）らの研究者によると，66％が未解決で，解決した事例も平均5年を要し，会社が暴力的に住民を脅し和解交渉を迫った例が多く，地方政府や警察の仲介で合意したものは3割にすぎず，RSPOの紛争パネルも効果的でなかった。裁判になった5例中の2例で住民が勝訴したが会社は判決を履行しなかった。研究者らは県政府による紛争の予防と解決への戦略的関与が必要とする。[Jakarta Post　1月29日]

法的欠陥でインドネシアでは違法材が輸出認証

EIAとKaoem Telapakが木材企業50社以上の法執行を調査した報告書によると，価値の高い熱帯硬木メルバウの違法材を輸出する企業が大半にのぼるが，訴追を逃れている。起訴され有罪が確定した少数の企業も操業が認められ，木材輸出に必要な合法材証明を保持したままである。最高裁が有罪判決を覆し密輸業者を釈放し押収した違法木材を返還した例すらある。[Mongabay　2月2日]

政府の推進するパーム油ディーゼルは諸刃の剣

インドネシア政府は2018年以来，脱炭素と石油輸入削減，パーム油の国内需要喚起策としてバイオ燃料政策を推進。2019年末からはB30を義務化し，昨年はパーム油生産量の17％が燃料用に使われ，運輸燃料の約半分に達した。政府のグリーンディーゼル推進の目標達成には1500万haのプランテーション新規開発が必要と見込まれ，森林破壊と結びつく開発を環境NGOらは強く批判。[Reuters　2月3日，日経　2月15日]

南カリマンタン大洪水と炭田の関連性と政府政策

南カリマンタン州では1月上旬の大雨で11万人以上が罹災する大洪水が発生。環境NGO等は上流でのアブラヤシ農園と炭田開発による森林破壊が原因と主張したが，政府はその関連性を否定。しかし規制緩和下で炭田開発許可を発行した政府への批判が高まり，政府は露天掘り跡を放置した炭鉱に修復と再植林を命じる方向に転じ，警察も炭鉱と洪水の関係を精査。[Mongabay　1月22日，2月8日ほか]

インドネシアの森林破壊は東方パプア地域に移動

NGO連合の報告書によるとインドネシアの森林消失は2010～14年に比べ2015～19年は全国的には17％減少した半面，全国の森林の80％を占める10州では増加。特に森林の約40％を占めるパプア両州ではアブラヤシ，パルプ材，鉱山開発，道路建設により森林破壊が急速に進んだ。その他の州では伐開できる森林がすでに残されていないことを意味する。[Mongabay　3月1日]

パプア地域の森林110万haが開発の危機に

パプア地域に広がる110万haの天然林はすでに森林転換許可が発行され，大規模森林破壊が合法的に可能。現在は99％の森林が残るが，今年末で期限が切れるアブラヤシ新規開発モラトリアム終了後に開発が進むとNGOは懸念。許可保持企業が未利用地の転売で利益を得ることは，開発許可の偽造が発覚した28万haで世界最大のアブラヤシ農園Tanah Merah Projectでも横行し，許可の有無に関わらず二次林も含めた包括的な伐採禁止措置が急がれる。[Mongabay　3月8日]

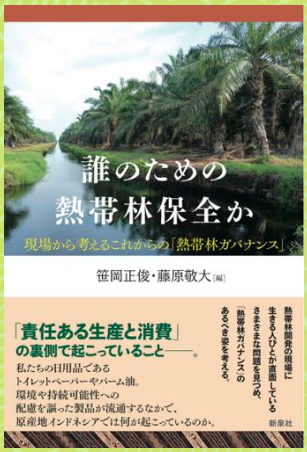
インドネシアの森林消失は前年比75％減少した

政府の発表で2020年の森林消失面積は11万ha余りと前年比75％減少，1990年の統計開始以来の最低を記録。政府は原因を原生林の伐開とアブラヤシ新規開発のモラトリアム政策に帰すが，環境NGOらはその他の要因，雨の多さ，パーム油価格の下落，コロナ禍による経済活動の低下で農園開発や伐採が減少したことも大きいと指摘し，経済活動回復によるリバウンドを懸念。[Mongabay　3月9日]

イノさんの気まぐれ読書あんない

『誰のための熱帯林保全か』

笹岡正俊・藤原敬大〔編〕　新泉社　2021年3月



「責任ある生産と消費」の裏側で起こっていること―。
（本の帯より）
「環境への配慮」を表明する企業が増えた。身近なコンビニにも、"FSC　森林認証紙ミックス"(何%入っているか尋ねたが不明)のティッシュなどが目につくようになった。
しかし、SDGsの合唱の中で、かえって生産現場の声が聴こえにくくなったようだ。
本書は、8人の著書がそれぞれ違法伐採、「不法占拠者」、パーム油「認証制度」が現地にもたらしたもの、等のテーマで書いている。地域住民や労働者など「現場に生きる人びと」の立場に寄り添いながら、公正で持続的な熱帯林の利用、管理を住民、NGO、政府、企業等が協働する「熱帯林ガバナンス」のあり方を探る。執筆者は、環境社会学者、インドネシア地域研究者、熱帯林に関わるNGOスタッフなど。ウータンとも調査や提言などで協力いただいている方もある。
わかりやすい解決策が得られるわけではないけれど、「環境に良い」商品を買おうと努めている貴方も、一読してみては？

ボルネオ熱帯写真館 今号の一枚

ラフレシアは、茎や葉を持たず、特定のつる植物に寄生して生きる寄生植物です。いわば巨大なキノコのような生き方をしています。
この種は9か月に及ぶ長いつぼみの期間を経て、寿命わずか1週間ほどの花を咲かせます。大きさは60cm！！

▼ボルネオ熱帯写真館より
http://tropicture.hutangroup.org/

会計より

ありがとうございました！

✱ 会費や寄付等をいただいた方　2020/2/1～3/31（五十音順、敬称略）

池田真一、石井雄二、上田真弓、馬橋憲男、笠原英俊、加藤可奈衛、金澤徹、カブレラ純、上萩寛、川嶋加奈子、康由美、北出祥子、小吹岳志、霜出明子、城純子、杉田知洋江、須藤有美、多々納眞弓、谷口正次、寺井栄治、浪川光代、長谷川薫、馬場慶子、東谷陽子、深水正和、藤岡正雄、三谷義臣、緑の社会福祉士、村田嘉彦、米澤興治、Raupach Sumiya Joerg

ボランティア紹介

こんにちは。ウータン・森と生活を考える会でボランティアをさせてもらっている北村翔一です。私は、熱帯林の問題や動植物についてウータンのSNSで情報発信をしています。今回、私の自己紹介をしたいと思います。私は2000年11月11日、タイのバンコクで生まれました。私はタイと日本のハーフです。タイには12年間住んでいました。小学校を卒業してから日本に来ました。現在は、20歳で大学3年生です。大学ではいろんな国の人々と一緒に国際問題について学んでいます。趣味は、ボランティアすることと、音楽を聞くことです。今までいろんなボランティアをしてきました。例えば、募金活動、国際協力イベント（ワン・ワールド・フェスティバル for Youth）のボランティアリーダー、ゴミ拾い、ビーチクリーン、通訳、翻訳、そして情報発信などをしてきました。高校1年生から始めたので、ボランティア歴は5年になります。初めて国際問題のことを知ったとき、こんなに多くの問題がこの世界に存在していることにとても驚きました。私が国際貢献を続ける主な理由が2つあります。一つ目は、私たちが経験した辛い思いや辛い経験を次の世代に同じような経験をしてほしくないからです。二つ目は、地球にはこれからも長生きしてほしいからです。これからもボランティアを続けて、頑張っていきます。

学習会のお知らせ

ジャングルふれんず PRESENTS 熱帯林セミナー

生物多様性条約から得られるヒントと今後危惧されること

2021年7月10日（土）14:30～16:30　参加費無料
@ルマ・ボルネオ（大阪都島）＆オンライン同時開催

生物多様性の保全のために、市民／消費者として
グリーンウォッシュにどう強くなり、行動できるか？
草の根のプロジェクトに支援をつなげるには
どうすればいいのか？

総会のお知らせ

学習会では久しぶりに大阪に帰ってくるゆっこを講師として迎えます！
学習会のあともゆっこととともに休憩をはさんで総会を開催します。

日時：7月10日（土）17:00～19:00までを予定

場所：オンラインまたはルマ・ボルネオ
（都島区都島本通3-8-10／大阪メトロ谷町線都島駅 徒歩３分）

学習会申込フォーム

総会申込フォーム

お申込み：学習会、総会それぞれ専用フォームへ記入ください ➡
またはcontact-hutan@hutangroup.orgまで、
①お名前、②連絡先、③会場参加かオンライン参加かをお知らせください

ウータン・森と生活を考える会
【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西 1-6-36
サクラビル新館 308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561
mail：contact-hutan@hutangroup.org
http://www.hutangroup.org

【年会費】4000 円
【郵便振替】00930-4-3880
◉購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
◉ウータン定例会は、火曜日 7:00pm より「関西市民連合」事務所にておこなっております。

この会報は、間伐材と古紙70%配合の再生紙と自然エネルギーを使用して印刷しました